

隠れた宇宙大国、インド 火星周回軌道への探査機投入成功は世界で4番目、アジアでは初の快挙！

パワフル・インド（政策関連） ～拡大するインド宇宙産業のビジネスチャンス～

▶ インドの宇宙開発の歴史

インドの宇宙開発の歴史は古く、ロケットと人工衛星の両方を自国で製造できる世界でも数少ない宇宙大国です。

1962年 インド国立宇宙研究委員会（現インド宇宙研究機構）設立

1972年 インド宇宙庁設置

1975年 旧ソビエト連邦のロケットを使用して初の人工衛星を打上げ

1980年 国産ロケットによる人工衛星打上げに成功

※自国ロケットによる人工衛星打上げとしては世界で7番目

2008年 月の周回軌道への探査機の投入に成功

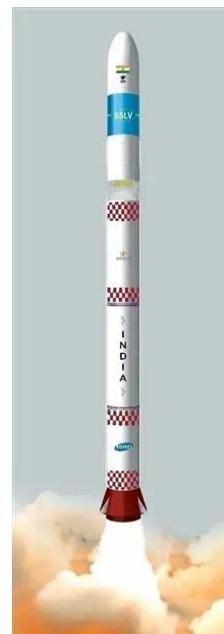
2013年 火星探査機マンガルヤーンを載せたロケットを打ち上げ

2014年 探査機マンガルヤーンを火星周回軌道へ入ることに成功

※当時、火星周回軌道への探査機投入成功は米国、ロシア、欧州に次いで世界で4番目、アジアでは初の快挙でした。低予算でプロジェクトを成功させたこの話は映画化もされています。

2017年 104個の人工衛星を搭載したロケットを打ち上げ

※これだけの数の人工衛星を1つのロケットで打ち上げるのは世界初となりました。



▶ 宇宙ビジネスの進展に向けた足もとの動き

モディ政権は発足当初の製造業振興策「メイク・イン・インド」に続き、新たな産業の需要喚起と輸入依存から脱するため「自立したインド」を打ち出しており、その柱の1つとして宇宙産業に対する規制を緩和し、民間企業の参入を促進しました。

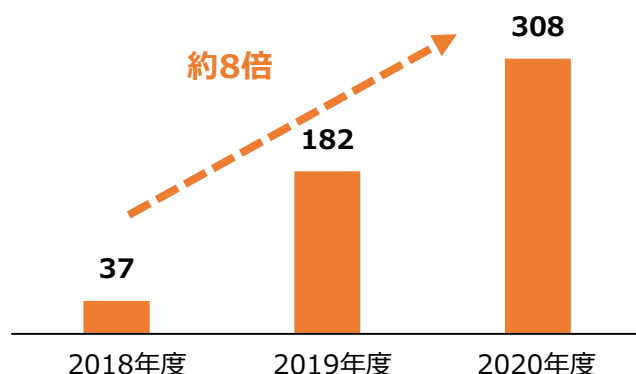
2022年6月 海外の人工衛星3機に加え、インドのスタートアップ2社が製造した人工衛星を搭載したロケットが打ち上げられました（インド初の国産民間衛星の打ち上げ）。

2023年2月 小型衛星や超小型衛星の高頻度・低コストな打ち上げを目指して開発された新型ロケットの打ち上げにより、米国企業の衛星を含む3つの人工衛星の軌道投入に成功しています。

更にインドでは2030年頃までに独自の宇宙ステーションを作る計画も示されており、今後の官民あがての宇宙ビジネスの発展が予想されています。そのため、インド宇宙産業のビジネスチャンスは更に拡大することが期待されています。

宇宙関連スタートアップ[※]資金調達額の推移

単位：億米ドル





ご留意事項

- 当資料は、情報の提供を目的として、パインブリッジ・インベストメンツが作成した参考資料です。金融商品取引法に基づく開示書類ではありませんし、特定の有価証券の売買、ファンド、商品を勧誘、推奨するものではありません。
- 当資料は、信頼できると考えられる情報に基づいて作成しておりますが、情報の正確性・完全性について当社が責任を負うものではありません。当資料中の記載事項、数値、図表等は、当資料作成日時点のものであり、市場の環境やその他の状況によって予告なく変更することがあります。なお、当資料中のいかなる記載事項も、将来の投資機会または運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。
- 投資信託は、値動きのある資産（外貨建資産には為替変動リスクもあります。）を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書（交付目論見書）をご覧ください。



パインブリッジ・インベストメンツ株式会社
金融商品取引業者 関東財務局長（金商）第307号
加入協会：一般社団法人投資信託協会
一般社団法人日本投資顧問業協会
一般社団法人第二種金融商品取引業協会